

「サロン」万歳 西本拓史

地理学教室五十周年おめでとうございます。私は今年の春に卒業したばかりなので、卒業生の中では一番後輩になると思います。現在、私は立命館大学国際関係研究科の博士前期課程（安斎育郎ゼミ）に在学しています。ほんの数ヶ月前まで大阪市立大学に通っていたのに、非常に懐かしく感じてしまい、時間のたつのが本当に早いと思っています。

ところで、今回この原稿の依頼が来たとき、地理学教室の歴史を改めて感じるとともに、自分の当時のことを思い出していると、とても複雑な気持ちになりました。私は御世辞にも模範的な学生とは言えず、初年度は一度も教室に顔を出すこともなく終わってしまいました。次年度以降も授業への出席等も満足ではなく、地理学の何たるかをつかみきれないまま卒業したという気持ちが、今になっても強く残っていることもその原因かもしれません。お世話になった先生方の期待（されていなかったかもしれませんが）にも応えることができなかったと思います。

けれども、地理学教室に在籍していたとき経験したことは、結果としてみれば、私にとって有意義なことでした。当時の思い出を辿れば、色々なことが思い出されます。普段の授業はもちろん、苦しい卒論作成や、そのための調査も兼ねて（？）、同期の中田君と沖縄に旅行に行ったときも良い経験をしました。その中でもとりわけ印象深いのは、地理学教室の巡検でした。この巡検こそは、私を地理学教室へと導いてくれたものでした。これがなければ、私はもっともっと辛い学生生活を送っていたかもしれません。春巡検もそうですが、やはり秋巡検（横須賀・川崎方面）が私には大きな意味をもちました。三年生になって初めて地理学に顔を出した私は、なかなか教室になじめず、半年が過ぎても後ろめたさは変わりませんでした。しかし、秋巡検に向けて周囲の人達と準備をしていく中で、やっと私は地理学教室の一員になることができたのです。些細なことかもしれませんが、当時の私にとっては非常に大きな問題でした。そして、一年遅れた分、下級生と仲良くなれたことも追い風になったと思います。巡検はほとんど遠足気分で臨んだのですが、実際歩き回っていると相当疲れるものでした。けれども、やはり初めての町ですから、色々なものが新鮮で解放感にあふれ、そのままの勢いで夜の飲み会に直行したため、加減というものを知らず、次の朝には予想通り激しい頭痛と胸焼けに襲われたのでした。

また、巡検の間に、たくさんの人のお世話になりました。特に博士課程の加藤さんには、そこら辺を歩き回りながら色々なことを教えていただいて、非常に感謝しています。そういうわけで、この巡検を通して、私は知らないところに出かける楽しさと、調査・研究の難しさを少しわかったような気がしました。あれこれ考えていることは簡単ですが、実際形にしようとするは大変です。まして、それを筋の通ったものにするとなるとなるとおさらです。子供の頃から、想像力あるいは空想にものをい



せて生きてきた私にとって、大学での研究は大きな壁になりましたが、以上のような準備段階からの様々な体験によって、巡検の意義がどこにあるのかを、自分なりの勝手な想像ではありますが、理解したと思います。

そして、いま私は他大学の大学院にいるわけですが、いまの大学と大阪市大の地理学教室を比べてみると、色々な違いがあることに気がつきます。例えば、院生の数や施設の整備に差があります。いまの大学は「共同研究室」という形になっている大部屋で、百人以上の学生が一つの部屋を共有しています。そして、パソコンはその部屋に三台、机は二人に一つなのです。人数が違うので仕方ありませんが、最初は大変なカルチャーショックでした。市大の文学研究科は地理学、社会学、史学、文学などでほとんど別々にわかれています。こちらは国際研究科という単位の下は、すぐに教授個人のゼミになります。普通はどこでもそうなのかもしれませんが、市大地理学教室を当たり前と思っている私には、想像していた以上に違和感がありました。

そして、私がこのことや、先程の巡検に関連して、市大地理学教室の大きな特長と考えていることは、地理学教室は院生と学部生、そして教員全体とのつながりが日常的に保たれている、ということです。もちろん、これは私が市大にいた頃から知っていたことですが、いま新しい環境に身をおいてみると、本当に強く感じます。これは非常に意義の大きいことだと思います。現在の大学では、確かに担当教官のゼミがあり、それは大きな存在ですが、他の教員とはあまり関わりがありません。私は他の教員とは授業以外ではほとんど面識がありませんし、学部生とは担当教官のゼミ学生であってもまったくと言っていいほどつながりがないのです。院生と学部生は教室どころか校舎、キャンパスまでが別々です。私は市大在学中、院生から色々とお話を聞きました。西部さんには個人指導までしていただいた程です。地理学教室では、そういう雰囲気は日常的にあるのですが、いまの研究科にはありません。もちろん、だからといって困ることはないのですが、少し寂しい気持ちになりますし、教室全体のためには教員、院生、学部生が相互に関わりがあるほうが良い、と私は思います。

ここにはやっぱり、「サロン」と呼ばれるあの部屋の存在が大きいです。常に全員が集まってくるわけではないにしても、大体いつも誰かがいて、教員も頻りに顔を出すという部屋の有り難みというか、重要性は、外部に出て改めて感じるものです。巡検もそうですが、やはりそれは一つの具体的な事例なのだと思います。「サロン」あつての地理学、とまでは言わないけれど、欠かせない存在ではないでしょうか。少なくとも私はそう信じています。だから、これからもあの部屋は地理学教室の財産として存続させてほしいと思います。「サロン」よ永遠に・・・

地理学教室の歴史の中で、私が在籍していた期間はほんのわずかだろうし、私の人生の中で地理学教室に在籍していた期間もわずかなものに過ぎないでしょう。けれども、確かに私はそこにおいて、大切な学生生活の数年をそこですごしたことは間違いないことです。だからこそ、やはり愛着があり、今後も盛んであってほしいと思っています。

最後になりましたが、同期生を代表して、地理学教室の更なる発展を願うとともに、在学中お世話になった方々にお礼申し上げます。

ありがとうございました。